

生業研究における課題と方法

—現代の農業と他の仕事との兼業という働き方を考えるにあたって—

渡部鮎美*

1. 現代の民俗学の課題—多様化する生き方をとらえる視点

本論は現代民俗学の課題と方法を検討するにあたり、これまでの生業研究を整理し、新たな視点と方法を提示するものである。ここで示す新たな視点とは個人の一生や一年、一日を単位として働き方をみる視点である。本論ではこの働き方の視点から、地域に生きる人々のライフスタイルを論じる方法を示す。研究史をふりかえるにあたっては民俗学に限らない幅広い分野の先行研究の成果を示し、そこから現代の民俗学の課題である、現代の人々の生き方を論じる方法を検討する。

現代は人々の生き方が多様化し、働き方も千差万別となっている。そうしたなかで1年間に2つ以上の仕事を兼業するという働き方は現代のワークスタイルのひとつのトピックとなっている。現在では日本の労働者の4割近くが2つ以上の仕事を兼業している¹。また、歴史的な側面からみれば、兼業という働き方は出稼ぎなどにみられるように古くから存在する。つまり歴史的にも現代的にも兼業という働き方は看過できないワークスタイルなのである。そして、現在、日本で最も多い兼業形態は農業と他の仕事の兼業となっている²。

農業と他の仕事を兼業しているのは兼業農家と、農家の忙しい時期に作業を手伝う農業パートたちである。兼業農家は近年では日本の販売農家の8割に迫っている³。また、全国で100万人以上が農業パートとして働いている⁴。現在の日本の農業は兼業農家や農業パートによって支えられている面が多分にあるのである。さらに、農業パートのなかには主婦やフリーターなどの非農家もいる。このことは今や、農業と他の仕事を兼業する働き方は農家だけのワークスタイルではなくなっているということの査証でもある。

歴史をさかのぼれば、農業パートと同様に、農繁期にだけ雇われて農作業をする早乙女や茶摘みのような季節労務が存在してきた。農業の場合には早くから農作業の賃金労働化が進み、農家労働力として農家の家族だけではなく、多くの季節労働者を受け入れてきたのである。さらに近年では農家の高齢化や労働力の不足から企業や個人が農作業の一部や全体を請け負うようになり、農作業の賃金労働化が著しく進んでいる。現代においては農作業の賃金労働化や外部委託が進んだことによって、農家だけが農業の担い手ではなくなっているのである。

このように農業への人々の関わり方や農業という産業の担い手が多様化するなかで農業と様々な仕事を兼業する働き方は農業という産業にとどまらず、現代社会全体においても看過できないワークスタイルとなってきている。そして、人々と農業との関わり方が多様化する現代

*総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻博士後期課程

にあつては、農業と関わる人々を農業という生業や農家という職業で区分して論じることが難しくなっている。農業への多様な関わりを農業というひとつの「業」の中に押し込めて典型的に理解することだけでは、人々の働き方や生き方を理解することができなくなっているのである。

すでに先行研究では農業との関わり方の多様化を通時的にあるいは共時的に記述してきた。通時的な分析では、漁業と農業の両方に関わる半農半漁という生活が家庭内や集落内の分業によって成り立っていたことが明らかにされ、漁民の農業への関わりが示された（高桑 1983）。共時的な分析では、農業を中心とした生活をする人々が河川や水田などでの漁撈や、山野での狩猟などの諸活動にも関わりながら暮らしてきたことが明らかにされた（安室 2005）。つまり、これらの先行研究では人々の農業への関わり方の多様さを示し、農民や漁民と呼ばれてきた人々の生活が農業や漁業といった一つの産業だけで語れるものではないことを指摘しているのである。

そこで、本論では1960年代から現在までの現代日本において、農業に関わりながら暮らす人々の働き方がどのように評価されてきたのかを、農業と他の仕事を兼業する彼らのワークスタイルに関する先行研究を通して論じる。それとともに、これまでの人々の働き方を扱ってきた生業研究の方法について検討し、新たな視点を示したい。

2. 先行研究における兼業という働き方の評価—分析視角の問題

現代日本における農業と他の仕事を兼業する働き方についての先行研究の視点は大きく①政治・経済的視点、②文化的視点、③生業の視点に分けることができる。①の政治・経済的視点は主に農業経済学・労働経済学・労働科学などで用いられた。そこでは経済的・計量的分析によって労働実態が数値化され、兼業という働き方は政治や経済の変化によって生まれてきたと論じられてきた。②の文化的視点は社会学・歴史地理学等での地域研究やジェンダー研究にみられる。文化的視点からの研究では兼業という働き方を地域や家庭内での役割などに注目して論じてきた。③の生業の視点からの研究は生態人類学・社会心理学・民俗学などがおこなわれてきた。生業の視点からの研究では①の政治・経済的な視点と②の文化的視点の両方から兼業という働き方を分析し、その意味を問うてきた。以下ではそれぞれの視点からの研究を仔細にみていく。

① 政治・経済的視点からの研究

政治・経済的視点からの研究では主として農林水産省や厚生労働省などの行政による統計資料や、実際の労働を計量・計測して得られた数値を分析してきた。事例としては兼業農家と農業パートを取り上げ、農業と他の仕事とを兼業する彼らの働き方がどのような経済的問題を抱えているのかを論じている。そして、兼業という働き方を生み出した政治や経済の変化について検討をしてきた。

まず、兼業をする人々の労働実態については労働科学や農業経済学などの分野で労働時間な

どを計量・計測し、農業や兼業する仕事にどのくらいの労働負荷や労働時間を費やしていたかなどの数値化を試みてきた。また、兼業農家や農業パートの労力や兼業形態については農林水産省や総務省が把握に努めてきた⁵。先行研究ではそうした行政による統計や実測によって得られた数値化された資料にアンケート調査などを加え、兼業農家については農作業にかかる時間が少なく、農業の粗放化が進むなどの問題を指摘された（御園 1983）。農業パートについても賃金の低さや勤務時間や労働条件などの労務管理について問題が指摘されている⁶（渡辺 1987、栗田・品部・鈴木 1988）。

農業経済学や農村社会学などでは上記のような問題を抱えた農業と他の仕事を兼業するという働き方がどのようにして生まれ、現在まで維持されてきたかを政治や経済の変化から明らかにしてきた。そして、政府や地方自治体の農業・農村振興策や、資本主義経済の農村部への流入などが専業農家の多くを兼業農家に変えていったことを示してきた。たとえば、青木紀は農業と他の仕事を兼業する働き方が国や地方の政策としての副業奨励や農村への工場の誘致、農家経済への資本主義の浸透によって生みだされたと論じている（青木 1988）。また、農業パートについては、村松功巳が戦後の農業規模拡大によって不足した労力を補う存在としてパートが台頭してきたとする（村松 1973）。さらに、細谷昂は高度経済成長期の賃金上昇と農業の機械化が農家の兼業化を促し、それとともに農家の農業労働力が著しく減っていったことを指摘する。そして、労働力の不足で共同作業が成立しなくなったことで農作業の個別化と賃金労働化が進んだことを指摘している（細谷 1998）。つまり、政治・経済的視点に立った先行研究では現代の兼業農家や農業パートを農村・農業政策と資本主義経済の浸透によって生じたものとみてきたのである。

② 文化的視点からの研究

政治・経済的視点からの研究が農業と他の仕事を兼業する人々の働き方の経済的・政治的な側面を明らかにした一方で、文化的視点からの研究では人々の働き方のなかに垣間見える文化的・地理的な側面にも目を向けた。

文化的視点からの研究ではアンケートや聞き取り調査を主体に、農業と他の仕事を兼業する人々の働き方を論じてきた。事例としては兼業農家と農業パートを取り上げ、彼らの働き方を規定している地域社会や家庭の構造を明らかにしようとしてきた。また、事例を絞り込まずに、日々の暮らしのなかで営まれる生業について広く記述をするという方法も用いられ、地域の生業を総体として招く民俗誌が数多く生まれた。

こうした方法で兼業農家と農業パートを事例に農業と他の仕事とを兼業する働き方について論じてきたのは村落社会学や、歴史地理学、民俗学などである。そこでは、地域によって異なる兼業形態と兼業という働き方を支える地域社会の構造が明らかにされてきた。

兼業農家を事例とした研究では工場勤務や出稼ぎ、行商などの様々な農業との兼業形態が示されてきた。工場勤務については労働実態と兼業形態の調査から、兼業する仕事と農業との両

立を支える労働体系ができていることが指摘されている。工場で農繁期に休みが取れることや集落内での農作業の委託や受託が工場勤務を可能にしてきたというのである（中央大学経済研究所 1982）。同様に収穫を可能にする地域構造についても歴史地理学や経済学などで検討がされ、収穫先や収穫期間、年間の農作業の違いによって地域ごとに兼業を支える構造がつけられていたことがわかっている（松田 1978、大川 1979）。また、主に農家の女性がおこなってきた行商は聞き取り調査や文献資料から、兼業労働を支える地域社会の構造だけではなく、女性の農作業の負担を減らす家庭内での役割分担によって成り立っていたことが指摘されている（佐藤 2002）。さらに、兼業農家を事例とした研究では行商に限らず、農家女性の兼業に関する研究が蓄積されている。具体的には田植えの早乙女や茶摘みなどの農業の季節労務と、工場勤務や内職などの農業以外の兼業労働を事例とした研究がある。

農業の季節労務は農業パートの前身として捉えられ、現代の農業パートはユイのような古くからの共同労働まで遡る季節労務が資本主義経済の浸透によって賃金労働に変わったものとされてきた（中村 1997）。農業以外の兼業労働については、農家女性が兼業労働で個人的な収入を得るようになったことで女性の家庭内での経済的・社会的自立が促されたという評価がされている（細谷 1993、永野 1994、佐藤 2003）。また、農家女性の兼業は家庭内での旧来の女性の役割や地位にとらわれずに、家事や農業、兼業する仕事に対してつぎ込む労力を自身で調整することで可能になっていたことがわかっている（加藤 1992）。

このように文化的視点からの研究では農業と他の仕事を兼業する働き方を支える構造を地域社会や家庭、ジェンダーと結びつけて論じてきた。他方で民俗誌では兼業という働き方を支える構造ではなく、働き方自体を記述してきた。一例をあげれば、宮本常一や湯川洋司、香月洋一郎、野口武徳らが農業を営みながら漁撈や狩猟、収穫などをする山間部や島嶼部の人々の生活をエスノグラフィックに記述している（宮本 1993、野口 1972、香月 1995、湯川 1997）。そして民俗誌では兼業という働き方を含めた人々の生活の全容が明らかにされている。

③ 生業の視点からの研究

上述の文化的視点からの研究は人々の働き方にみられる地域性や文化性を示したが、調査では計量・計測がおろそかにされ、分析においては時間軸の設定が曖昧にされてきた批判をされている（安室 1998）。また、文化的視点からの研究に含まれる民俗誌での生業の記述は「単なる技術の羅列」と評されることになった（同上：p39）。

そこで、生業の視点からの研究では地域性や文化性に目を向ける文化的視点と計量・計測によって数値化を目指す経済的視点の両方から、農業と他の仕事を兼業する人々の働き方を論じた。それを可能にしたのは参与観察による計量・計測でデータを数値化し、聞き取り調査で地域性や文化性にも細やかに目を配るフィールドワークの手法であった。生業の視点からの研究ではフィールドワークによって、人々がどのように生業を組み合わせで働いてきたのかを明らかにし、個々の生業の意味を問うてきたのである。その成果は民俗学や人類学において生業複

合論とマイナー・サブシステム論という2つの大きな論に結ばれた。

まず、生業複合論では時間軸のはっきりした定量的なデータを用いて農業と他の仕事を兼業する人々がどのような生業を組み合わせで働いてきたのかを明らかにしてきた⁷⁾。生業複合論では人々が農業と兼業する生業の組み合わせの多様性を示し、農業と他の仕事を兼業する働き方が地域の環境や社会構造によって異なることを論じてきたのである。さらに生業複合論の視点に立った兼業農家の研究では、漁業と農業の兼業が生計維持のために補完的におこなわれているのではなく、兼業によって利益の最大化を目指すためにおこなわれていたことを示している(卯田 2003)。

このように生業複合論では農業と他の仕事を兼業する働き方の多様性を各地でみられる生業の組み合わせの多様さで示した。また、人々が生計維持のためだけではなく、利益の最大化を目指して戦略的に農業と他の仕事を兼業する働き方を選ぶことがあることも指摘した。しかし、生業複合論に対してはいくつかの限界も指摘されている。たとえば、矢野晋吾は出稼ぎを事例に生業の組み合わせによって人々の働き方を論じることの限界を指摘し、生業が組み合わさった状態そのものを論じることが重要であるという。

矢野が事例としたのは安室が取りあげた農業を中心とした生活をする人々ではなく、農業と出稼ぎの両方で高い技能を発揮する人々の生業であった。そこで矢野は彼らの生業を本業と副業として区分するよりも、兼業という状態をそのまま捉える方法を示し、兼業を維持できる柔軟な社会や家の構造を論じた(矢野 2004)。

生業の視点からの研究でもうひとつのトピックとなっているマイナー・サブシステム論は人類学者の松井健が経済性が低いものの地域で続けられている遊びの要素の強い生業活動をマイナー・サブシステムとして定義したことに端を発す議論である(松井 1998)。そして、マイナー・サブシステムの発見は生業という概念を趣味とする釣りなどの漁撈活動や山菜採りなどを含めた生活全般に渡る生業活動として再定義することにもなった。これは人々の働き方をみる視点を純粋な労働からより広汎な生活のなかでおこなわれる活動全体にまで押し広げるものでもあった。

松井が定義したマイナー・サブシステムに対して、民俗学ではマイナー・サブシステムがなぜ続けられているのかという問いをたて、マイナー・サブシステムのもつ経済性や、経済性に代わる楽しみなどの何かしらの意味や価値を論じてきた。そこで人々がマイナー・サブシステムが続いている要因として指摘されたのは、生計活動の上で小さいながらも何らかの経済的寄与があること、生計を担う主たる生業の邪魔にならないこと、遊びの要素をもつことであった(安室 2007)。また、マイナー・サブシステムに関わる人々は経済性に代わる「楽しみ」や地域社会に対する貢献をしているという誇りを持っていることも指摘されている(菅 1998)。

しかし、ここで松井の定義に立ち戻ると、マイナー・サブシステムは「あってもなくてもいい」という意味のない活動でもあった(松井 1998:p248)。また、遊びの要素を含むマイナ

ー・サブシステムのよう活動について論じた人類学者のホイジンガは遊びの本質は終わることであるという (Huizinga 1955)。しかし、生業の視点からの研究ではあまりにマイナー・サブシステムが続いてきた意味やその価値が強調されすぎてきた。マイナー・サブシステムのもつ、あってもなくてもよく、飽きたら終わるとい側面にも目を向けるべきではないだろうか。そしてマイナー・サブシステムの意味のなさや終わりを考えるには意味や価値を論じてきた生業の視点ではなく、雑多な活動を含む人々の暮らしを総体的に捉える視点が必要になるのである。

3. 生業研究における視点と方法論の検討―業を超えた生きることの研究へむけて

これまでみてきたように、先行研究では現代日本における農業と他の仕事とを兼業とする働き方を政治・経済的視点、文化的視点、生業の視点から論じてきた。そして、人々の働き方を分析する方法としては統計資料などを用いた文献調査と、聞き取り調査や計量計測および参与観察をともなうフィールドワークなどを用いてきた。前述のように政治・経済的視点からの研究では統計資料を中心とした文献調査やアンケート調査を多用してきた。また、文化的視点からの研究では聞き取り調査に重点をおいたフィールドワークをおこなってきた。そして、生業の視点からの研究では両方の視点の研究方法を用いて研究を進めてきた。

筆者もこれまで、生業の視点からの研究のようにフィールドワークを調査手法としてきた。そして筆者はとくに参与観察に重点を置いた調査をしてきた。具体的には農家に住み込み、農作業をしながら労働時間を計測し、日常の活動を観察して行動記録をとるなど、生活に密着した調査をしてきた (渡部 2004、2008a、2008b、2008c)。さらに著者は聞き取り調査の内容を国土地理院発行の空中写真や、調査地で保存されていた地籍図や写真、帳簿などを活用して裏付けをしてきた。

先行研究では農家の兼業をそれぞれの視点から解明した。しかし、実際に農家や農業に関わるパートやアルバイトたちがどのように時間をやりくりして、農業の他にいくつもの仕事をしてきたのかなどを示す実証的な事例研究は少なかった。筆者が参与観察を重視したのはこうした先行研究に対し、より実証的な事例研究を提示するためでもある。そして、参与観察を重視したフィールドワークから得られたデータを用いて論を構成するに当たり、筆者はこれまでの農家と他の仕事を兼業する働き方の記述や農業と他の仕事を兼業する人々を農家、農民と呼ぶことに違和感を覚えるようになった。

現代の農業と他の仕事を兼業する人々の働き方は依然として農村や農業の疲弊や農家の貧困から生じたと語られることが多い。文学作品やルポルタージュなどでも戦後から現在まで、兼業農家といえば農作業に励み、冬は出稼ぎに行くという姿が描かれてきた⁸。生活のために出稼ぎに行き、辛苦を重ね、出稼ぎから帰れば、わずかばかりの土地を耕し、土にへばりついて草取りに汗を流す。まさに貧乏暇無しの兼業農家像が研究の世界でも永らく語られてきた。

一方で歴史学では農業と他の仕事を兼業する働き方が決して珍しいものではなく、農村や農

家の貧しさだけが農家の兼業の要因でなかったことを示している。歴史学では菊池勇夫らによって近世後期には北海道の鯨漁や他領の田畑耕作などに東北地方の人々が頻繁に出かけていたことが明らかにされてきている（菊池 1991等）。そして、他領への出稼ぎが単なる労働力の提供や貧困ゆえの労働ではなかったことがわかってきた（浪川 2005）。さらに商人や上層農民の経営史料の分析からは、近世後期においては農業を主とする地域であっても養蚕に関わる賃金労働や農産加工物を生産し、売り歩く商業的農業が発達していたことが示されている（深谷・河鍋 1988）。そして、商業的農業の発達には「農業の範囲を逸脱」するような動きともなり、農民という範疇に収まりきれない農家を出現させる（深谷 1993,210）。こうして、支配権力側の農業を生業とするものという農民像と諸種の業を営む実際の農民生活は大きく乖離していったというのである（渡邊 2007）。

明治期にも小作でありながら地主なみの立場と収入をもっていた富裕層の存在が指摘されている（堅田 1960）。さらに昭和前期に至るまで農家が日本の工業を支える労働力として質、量ともに重要なものであったこともわかっている（隅谷 1950）。いまや前近代や近代における農業と他の仕事を兼業する働き方は人々が貧困ゆえに選んできた特殊な労働形態ではなく、貧富に関係なく広くおこなってきた働き方として捉え直されているのである。

一方で現代でも農業と他の仕事を兼業する働き方に対しては貧困や特殊な労働形態というイメージが根強く残る。そのイメージを固定化させてきたのは前述の出稼ぎ研究や兼業農家研究でもある。多くの研究蓄積のある出稼ぎ研究の一端を解いても、農村や農業の疲弊から出稼ぎを余儀なくされた人々の姿や故郷に残された家族の暮らしが暗く、みじめに描かれている（渡辺・羽田 1987）。欧米諸国の兼業農家を対象にした研究からは農業と他の仕事を兼業する働き方が国際的な面からも歴史的な面からも広汎にかつ恒常的に存在してきたことが明らかになりつつある。だが、その兼業農家に対する評価は農業の持続に寄与するという程度のものである（是永 1984）。

しかし、近年の民俗学や生態人類学での研究では、現代の農業と他の仕事を兼業する働き方を新たな視角で捉えようとする動きもある。民俗学では松田陸彦が瀬戸内島嶼部の農業をしながら出稼ぎをする人々を「農家」として語ることの限界を示唆している（松田 2004）。また、農業ではないが、小川徹太郎は漁業を営む人々を「漁民」という言葉で語ることをやめ、彼らの生活そのものに迫ろうとした（小川 2006）。そして、小川はフィールドワークや史料分析を通して、マスメディアやこれまでの研究で描かれた漁民像とは異なる、生まれた土地を離れて船に住まい、海を渡って漁をする人々の姿を見つける。そこで小川は漁民という概念にとらわれずに、海を渡り歩く彼らの暮らしを観察し、そこから彼らの生活観や労働観を探るという方法をとる。

日本の事例ではないが、生態人類学では掛谷誠がアフリカの焼畑農耕民と呼ばれる人々の生計活動を調査し、彼らの生活が決して焼畑農耕に特化していないことを発見した。彼らの生活は焼畑農耕だけではなく、狩猟採集や漁撈などの複数の生業によって支えられていたのである。

その上で掛谷は彼らの生計活動のなかの自然利用に着目し、そこから焼畑農耕に限らない生活全般におよぶ「価値観や世界観をも含めた生活様式」を明らかにしている（掛谷 1998：p81）

松田や小川、掛谷らが農業に関わりながら働く人々を農家や農民として記述することに疑問を抱いたように、筆者も人々の生活をひとつの職業や生業の中に押し込めて類型化するだけでは理解できないと考えた。そこで筆者は農業と他の仕事とを兼業する人々の働き方を生業の組み合わせとしてではなく、一日や一年、一生というスケールでとらえて様々な仕事を渡り歩くワークスタイルとして論じてきた。そして、人々の働き方を視点に農業と関わりながら働く人々を論じることで「農家」という範疇に収まりきれない人々の労働観を明らかにしてきた（渡部 2008b）。

現代の農業と他の仕事を兼業する人々の働き方は一様に農業に特化しているわけではない。一日や一年、一生というスケールを設定して彼らの働き方をみると、一日のなかでも、一年のなかでも、また一生のなかでも自家の農業よりも出稼ぎや行商などの兼業に多くの時間を費やしている人も多い。その上、彼らの行動範囲は広く、関わってきた仕事の種類も多かった。農業以外の様々な仕事をしてきた彼らの一生は漁業でも商業でも、またその組み合わせとしても表せないほど流動的で活発で多様であったのである。そして、彼らの一生をその時々の生業の組み合わせとしてではなく、一生という時間のなかで、働き方を視点としてみたとき、そこに「軽々と家を離れ、職業を変えて働き、日々の仕事の中に楽しみをつくり出していくという生き方」が見えてくる（渡部 2008b：p108）。

このように人々の働き方を農業や農家と兼業する個々の生業の組み合わせとしてみるのではなく、総体として一年や一生、一日の流れのなかでみることで農民、農家として描かれてきた人々の業を超えた生き方が明らかにできるのである。

註

- 1 日本の労働者65,009,300人のうち2つ以上の仕事を兼業する者は25,548,00人おり、労働者の39%以上がなんらかの兼業をしている（総務省統計局 2004a,2004b）。
- 2 兼業として農業に関わっているのは766,600人で、農業を兼業とする人は全兼業者の30%を占めている（同上 2004b）。
- 3 2005年現在、日本の総農家数は2,848,166戸のうち販売農家は1,963,424戸である（農林水産省統計部 2006a：p 32）。そして、販売農家の77%にあたる1,520,266戸が兼業農家となっている（同上2006b：p64～65）。
- 4 農業パートとは農業統計では農業臨時雇および農業年雇にあたる。農業臨時雇や農業年雇は住み込みまたは通勤で期間を定めておこなわれる農業雇用労働で、農作業の請負や無償・有償での労力の交換は含まれない（農林水産省大臣官房統計情報部 2003：p21）。2005年現在、農業労働に従事している人（農家労働力）は農家の家族を含めて4,616,796人おり、このうち農業パートは2,410,289人で農家労働力の52%を占めている（同上 2006c：p 27）。

- 5 農林水産省では『農林業センサス』や『農業構造動態調査報告書』等で、総務省統計局では『就業構造基本調査』で農業と他の仕事を兼業する働き方を調査し、統計として刊行している。
- 6 先行研究では農業パートの労働問題を指摘する一方で、安定した雇用に成功した事例をもとにパートの労務管理の改善方策を示している(張・秋山 2006)。
- 7 具体的には聞き取り内容の文献資料による裏付けや、参与観察による定量的データを用いた論考がある(安室 2005)。
- 8 たとえば岩尾徹の『昭和農民始末』(岩尾 1987)や大牟羅良の『ものいわぬ農民』(大牟羅 1958)などがある。

参考文献

- 青木紀 1988 『日本経済と兼業農家』 農林統計協会
- 岩尾徹 1987 『昭和農民始末』 日本経済論評社
- 卯田宗平 2003 「両テンピン」世帯の人々 とりまく資源に連関する複合性への志向」
『国立歴史民俗博物館研究報告』105
- 大牟羅良 1958 『ものいわぬ農民』 岩波書店
- 小川徹太郎 2006 『越境と抵抗 海のフィールドワーク再考』 新評論
- 大川健嗣 1979 『戦後日本資本主義と農業』 御茶の水書房
- 掛谷誠 1998 「焼畑農耕民の生き方」
高村康雄・重田眞義編 『アフリカ農業の諸問題』 京都大学出版会
- 堅田精司 1960 「明治二十年代における富裕小作の実態」 『日本歴史』 149
- 香月洋一郎 1995 『山に棲む』 未来社
- 加藤眞義 1992 「農村女性の就労構造—山形県庄内地方の事例(一九九〇年時点)—」
『社会学年報』XXI 東北社会学会
- 菊池勇夫 1991 「近世後期の奥羽民衆」『北方史のなかの近世日本』校倉書房
- 栗田明良・品部義博・鈴木春子 1988 「農業パート・タイマーに関する実態調査結果」
『労働科学』64-7
- 是永東彦 1984 「兼業農家の視角と評価」
松浦利明・是永東彦編 『先進国の兼業問題』農業総合研究所
- 佐藤宏子 2003 「三世代家族における嫁と姑の世代関係」 『家族の変遷・女性の変化』
日本評論社
- 佐藤康行 2002 『毒消し売りの社会史—女性・家・村—』 日本経済評論社
- 菅豊 1998 「深い遊び—マイナー・サブシステムの伝承論」 篠原徹編 『民俗の技術』
朝倉書店
- 隅谷三喜男 1950 「労働力における封建的なもの—半農半工について」

『社会学評論』1-1

- 総務省統計局 2004a 「第2表 男女、就業状態、就業希望意識・就業希望の有無、求職活動の有無、年齢、教育別15歳以上人口」
『平成14年 就業構造基本調査報告 全国編』 日本統計協会
- 総務省統計局 2004b 「第56表 男女、本業の産業、本業の従業上の地位、本業の雇用形態、副業の産業、副業の従業上の地位別有業者数（副業がある者）」
『平成14年 就業構造基本調査報告 全国編』 日本統計協会
- 高桑守史 1983 『漁村民俗論の課題』 未来社
- 張日新・秋山邦裕 2006 「施設野菜園芸における雇用労働力の管理問題—一里原園芸組合「アグリタウン小山田」の事例分析—」
『鹿大農学術報告』 56
- 中央大学経済研究所編 1982 『兼業農家の労働と生活・社会保障』 中央大学出版部
- 永野由紀子 1994 「農村家族の変容と農村女性」 『東北文化研究室紀要』 35
- 中村羊一郎 1997 「季節労働の民俗」 『生業の民俗』 雄山閣出版
- 浪川健治 2005 『近世北奥社会と民衆』 吉川弘文館
- 農林水産省大臣官房統計情報部 2003 「利用者のために」
『農業センサス累年統計書(明治37年～平成12年)』 農林統計協会
- 農林水産省統計部 2006a 「総農家、販売農家、自給的農家別農家数」
『2005年農林業センサス 第3巻 農林業経営体調査報告書—農林業経営体分類編—』
農林統計協会
- 農林水産省統計部 2006b 「専兼業別農家数」
『2005年農林業センサス 第3巻 農林業経営体調査報告書—農林業経営体分類編—』 農林統計協会
- 農林水産省統計部 2006c 「農家労働力」
『2005年農林業センサス 第2巻 農林業経営体調査報告書—総括編—』
農林統計協会
- 野口武徳 1972 『沖縄池間島民俗誌』 未来社
- 深谷克己・川鍋定男 1988 『江戸時代の諸稼ぎ—地域経済と農家経営—』 農産漁村文化協会
- 深谷克己 1993 「商業的農業の技術」 『百姓成立』 塙書房
- Huizinga, Johan 1955(1971) Nature and significance of play as a cultural phenomenon,
HOMO LUDENS, a study of the play element in culture, Beacon Press
- 細谷昂 1998 「水稻集団栽培と村の変容」 『現代と日本農村社会学』 東北大学出版会
- 細谷昂 1993 「農村女性と家」
細谷昂・小林一穂・秋葉節夫・中島信博・伊藤勇

- 『農民生活における個と集団』 御茶の水書房
- 松井健 1998 「マイナー・サブシステムの世界—民俗世界における労働・自然・身体」
篠原徹編 『民俗の技術』 朝倉書店
- 松田松男 1978 「『伝統的』農民出稼ぎ・『産業予備軍型』出稼ぎの出身基盤の変化について」
『人文地理』 30-3
- 松田陸彦 2007 「瀬戸内海島嶼部の生業におけるタビの位置 愛媛県越智諸島の事例から」
『国立歴史民俗博物館研究報告』 136
- 御園喜博 1983 「兼業農業の構造—再編の方向と課題—」 農林統計協会
- 宮本常一 1993 『生業の歴史』 未来社
- 村松功巳 1973 「最近の農業雇用労働力の需給構造—北海道十勝平野の分析—」
『農業総合研究』 27-2
- 安室知 1998 「民俗学における生業研究の現状と課題—環境論からの発想と複合生業論—」
『水田をめぐる民俗学的研究—日本稲作の展開と構造—』 慶友社
- 安室知 2005 『水田漁撈の研究—稲作と漁撈の複合生業論』 慶友社
- 安室知 2007 「『遊び仕事』と『まごつき仕事』の意味—「小さな生業」の意味—」
『複合生業論』 (平成15年度～18年度科学研究費補助金研究成果報告書)
国立歴史民俗博物館
- 矢野晋吾 2004 『村落社会と「出稼ぎ」労働の社会学
—諏訪地域の生業セットとしての酒造労働と村落・家・個人—』
御茶の水書房
- 湯川洋司 1997 『山の民俗誌』 吉川弘文館
- 渡部鮎美 2007 「転換期における稲作の意味の変容と技術選択
—小規模・自給型稲作における技術評価—」 『総研大文化科学研究』 3
- 渡部鮎美 2008a 「農村女性によるヒマの発見—秋田県大潟村の農業臨時雇いを事例に—」
『総研大文化科学研究』 4
- 渡部鮎美 2008b 「歩く人生—秋田県八郎潟周辺の生業の変貌とその労働観」
『国文学 解釈と鑑賞』 73-8 至文堂
- 渡部鮎美 2008c 「農家の兼業はいかにして続いてきたのか
—農業と臨時雇いを兼業する人々の労働観—」
『国立歴史民俗博物館研究報告』 145
- 渡辺栄・羽田新編 1987 『出稼ぎの総合的研究』 東京大学出版会
- 渡邊忠司 2007 『近世社会と百姓成立—構造論的研究—』 思文閣出版
- 渡辺基1965 「農業臨時雇賃金の高さを規制する二要因」 『農業経済研究報告』 6